ふるさと館のみどころ（建物編）

建　物 （主屋）	明治前期に建築されたものを、明治末から大正元年に、安吉から当地へ移築した。北側の部分、玄関、控室、事務室等は、その際に新築している。 座敷の壁はこの辺りで最高とされる朱塗り壁となっている。
正面玄関前	柱は大理石張り、天井はケヤキの格天井（ごうてんじょう）。 ※二階屋根の東西両端に卯立。
玄　関	式台（上がりかまち）はケヤキ、天井は薩摩杉、欄間は一刀彫。
控　室 旧応接間	格天井の「市松」張り。事務室側の扉は、元鉛丹銀箔（えんたんぎんぱく）張り、引き手は銀。
御上の間 （おえ）	柱は８寸（約 27㎝）のケヤキ。囲炉裏の上の五本の太い梁や、一間ものの帯戸(西半)は、力強さが感じられる。かつては、囲炉裏で火を焚いたので、天井は吹き抜けだったが、移築の際に新しく天井を板張りとしている。囲炉裏の炉縁は黒柿のとら木(貼物)。帯戸の引き手には菊の御紋が入り、天皇家へ献穀していたものと推定されている。
朝顔の間	欄間は、おめでたい松竹梅に鶴亀の両面一刀彫り。床柱は、ちじみの面皮柱。下部にめでたい奇数・吉数の「1 と 9」の年輪がみられる。出書院で、床脇の違い棚の造りには格式がある。床縁はタガヤサン（インド・マレー諸島のまめ科の高木で、堅くて美しい材）。襖は、伝統的な葛の繊維を紡いだ糸からつくられた葛布（くずふ）を張っている。　※他の部屋の襖も葛布。
西 縁 側 東 縁 側	縁桁は北山杉の太いしぼりで 5 間もの。この一本でちょっとした家が建つ。
福寿草の間	吉田家では「孔雀の間」と呼ばれていた。襖は金銀箔張りで、引き手は金と黒漆の象眼細工。欄間は臍指(ほぞさし)のおさ欄間で材質は神代杉。控えの間の天井板も目の細かい神代杉。脇床の天板は虎目模様の栃の木の一枚板。床板はケヤキ、床の天井はクサマキの一枚板。天井の板は屋久杉。 縁側のガラスは大正時代のもので、空気が入り表面には凹凸がある。縁桁は太さが一様な杉の丸太の一本もの。
広　縁	平成 2 年に仏間・金庫室・和室等を減築し、庭を眺める部屋として新築された。仏壇は姉妹仏壇のひとつで、立派な仏壇は 2 基同時に作られることが多く、吉田家のものは現在、川北町草深(土室)の江戸家に、もう一つは安吉町の野村家にあるといわれる。 金庫は現在ふるさと館の内玄関に置いてある。金沢高田製で三光の桐に鳳凰とねじり梅の紋が入っている。鋼鐵第壱號で、一番大きい型の金庫である。左右の扉にダイヤルがあり、両方の扉が開かないと中扉(金文字の吉田家家紋、菱紋入り)も開けられない複雑な構造となっている。中扉の中には桐の箪笥が入っている。この様な金庫が、かつては 4 台あったと言われる。